# 禅寂作『月講式』について—東から西へ往く本尊—

猪瀬千尋

## はじめに

『月講式』は鴨長明（一一五五～一二一六）没後の五七日仏事に際し営まれた講会の式である。作者は来迎院五世長老・如蓮房禅寂（～一二四一）で、俗名藤原長親、もと日野流に属する文章博士であった。[1] 禅寂は長明の畏友であり、長明の大原から日野への移住に禅寂の影響があったことは、早くから指摘がされている。

『月講式』の諸本は陽明文庫本、金剛三昧院本、高野山大学図書館本の三本が知られ、このうち原態にもっとも近いとされる陽明文庫本の奥書には次のようにある。

建保四年七月十三日草レ之。蓮胤上人〈長明入道〉在生之時、欣楽レ行二此講演一、誹二式文一。而自然懈怠之間、空以入滅。後悔屠レ肝、無益嗟レ臍。仍為レ答二彼素意一、愁草二此式文一畢。　沙門禅寂

長明は存生時、月講の開催を願い、講式の作成を意図した。しかし「自然懈怠」のうちに長明は没してしまう。（いまその仏事に際し）故人の平生の意を汲んで作成したのがこの講式である、と禅寂はいう。すなわち、長明の素意に応えつつ、その追善をはかるというのが禅寂の主張であった。それは講式の廻向部分にも次のようにあらわされている。

仍以二此講演所生之善根一、資二彼蓮胤上人（長明）之得脱一。告レ別而五七日、迎レ秋而十四夜。

その研究史をたどるならば、堀部正二がそれまで定説をみなかった長明の没年を確定させるものとして陽明文庫本を紹介したことに始まり、三田全信によって陽明文庫本の全文翻刻がなされた。その後、桜井好朗による思想的解釈を経て、貴志正造が「三界唯一心」などの言葉を鍵として長明の思想の延長線上に『月講式』を位置づけたことを皮切りに、梁瀬一雄、重見一行、磯水絵、今村みゑ子、鈴木佐内、ニュールス・グュルベルグら諸氏

の研究が提出されるにいたった[2]。

講式という従来は看過されがちであった文献のなかで、長明という文学史上の巨人と重なるために、多くの研究者によって言及され、また諸本三本の正確な校異[3]も示されている『月講式』は、唱導研究の中でも恵まれた作品といえる。一方でその内容については未解明の点も少なくない。諸研究によってあぶりだされた課題としてまず初めに提起されたのは、禅寂が『尊卑分脈』に「源空上人（法然）弟子」と見えることから、法然の思想といかに結びつくかという点であった[4]。この問題は、顕密体制論以前の一般的認識であった旧仏教から新仏教へ、それに関わる文学の推移、それとともに長明と新仏教の関係性を見ていくという文学研究史上の流れに位置するものであったが、山田昭全の「これ（月講式）を浄土教系の講式とみるむきもあるが、実質は台密系とみるべきである[5]」という言葉に代表されるように、この点に積極的な意味は見いだしがたい。

これに対し、禅寂作の講式のうちに長明の思想がどの程度反映されているか、また『発心集』や『無名抄』に見える数奇の概念と、講式がどのように関わるのかという問題がある。この点については、諸氏の研究をまとめた今村みゑ子によって「数寄即仏道の思想に本質的に一致する（中略）長明が企画した月講の意図そのものと見るべきものであった[6]」という結論が示されているものの、必ずしも賛同を得られているわけではない[7]。

また出典研究についても幾つかの問題がある。『月講式』には数多くの内典外典からの引用がされており、この点については、今村やグュルベルグによって仏典は天台系の書物が、外典は『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』が中心として用いられている点が明らかにされている。一方で、典拠の文脈を踏まえ、『月講式』がいかなる意図をもってそれを引用しているかについては、なお検討の余地がある。

本論では、右に示した、長明の思想との関係性の把握、引用文献の実態解明という二点を、相互に連関する一つのテーマととらえ、『月講式』の典拠の文脈を踏まえることからはじめ、本尊や観想法の論理構成を読みといた上で、講式が主張する思想についての解読を試みる（なお以下、特に断りのない限り引用は陽明文庫本とする）。

## 一　講式の構成

『月講式』の式文は「明本地」「明垂迹」「明廻向」の全三段から構成され、このうち第二段の「明垂迹」がさらに三段「明帰依道理」「明滅罪生善」「明懺悔発願」に

分かれる。この不規則に見える式文構成に関しては、後にも述べるように、尊格の名称に不自然な点があること、明垂迹の段において本地仏が論じられていることなどから、禅寂が長明の仏事に間に合わせるため、短期間で講式を作成したために生じた矛盾と考えられる（以下、今村みゑ子に従って第一段、第二段一、第二段二、第二段三、第三段という分類を用いることにする）。

式文の前段には惣礼、伝供、法用、表白の次第が記されるが、陽明文庫本は表白を欠いており、以下の一文のみが記されている。[8]

今此講演作法不レ似二通途法則一。只対二虚空一讃嘆二月天一。其意所レ述略有二三段一、初明二本地一、次明二垂迹一、後明二廻向一也。

この講式は、（特定の仏像、仏画ではなく）虚空の月を本尊とするということが述べられており、『月講式』の第一の特徴はこの点に求められる。[9] 本尊が東から西へと移動するという点については、講式のコンセプトとの関係性が指摘されてよいのだが、この点については第五節で述べることとし、先に各式文間の概略について示しておく。

講式ではまず、第一段で本尊である月（講式中では「月天子」と称される）の本地が勢至菩薩であることが明かされる。ついで第二段では垂迹として名月天子なる尊格が明かされ、第二段三の式文で、この名月天子を前に、古より今にいたるまで月を翫ぶもの—月を詩歌に詠み、管絃を奏で、宴の席を設けるもの—すべての懺悔発願をおこない、第三段で廻向へといたる。論の中心となるのは第二段三の懺悔発露の部分であり、先行研究における考察の中心もこの読みにあった。

講式の構成自体は、懺悔発露を基点とした月を翫び妄念を生じる人々の救済であって、背景に澄憲「和歌政所結縁経表白」があったことは今村が指摘する通りである。[10] その論法は諸法実相論の範疇に属するものであろう。諸法実相論は、諸法（諸々の事象）は実相（真理）であると考えるもので、この実相の世界にあっては、「迷悟不二」「明暗一体」「逆即是順」など、背反にみえる概念もまた一体のものとされる。中世前期には狂言綺語観（綺語妄語とされる文学的営為も、仏法の導きであるとして肯定的に捉えようとする文芸観）と一体となって説かれた思想であった。詳細は後述するが、『月講式』は心の働きを月の活動に見立て、月の照寂が一体であるように、心にきざす妄念もまた悟りであるという思想を述べたものである。心を中心とした諸法実相論であって、その点でいえば、『月講式』は天台の理論に即した一般的な講式

ということになる。

## 二　本尊の重層性

しかしながら、空に浮かぶ月を本尊とする『月講式』の特殊性は、他の講式とひとしなみにできるものではない。講式の思想の解明のためにも、本尊がいかなる文献をもとにして形づくられているかを明らかにする必要がある。『月講式』は本尊である虚空の月を「月天子」と呼んでいるが、講式上ではその月天子が様々な尊格として示されている。そもそも講式における本尊の記述は、一つの経典によるのではなく複数の経典を横断して述べられる場合が多い。例えば『妙音講式』（十二世紀末成立）では『大日経』に見える妙音天だけではなく、『最勝王経』に見える弁才天、『法華経』に見える妙音菩薩が融合して示されている。[11]

『月講式』で語られる尊格とその典拠

月天子（月そのもの）

- 第一段
  - 勢至菩薩（『法華文句』）
    （※主要な典拠のみ記した）『観無量寿経』
- 第二段一
  - 名月天子（『法華経』序品、『法華経』裏王品）
    （※ただし裏王品での名称は「月天子」）
- 第二段二
  - 月光菩薩…『続高僧伝』
  - 月天…『大日経』『大日経義釈』

『月講式』の場合、さらに複雑になるので、はじめに構成を図式化したものを挙げ、これに基づいて解説を加えていく。

まず第一段であるが、冒頭には次のようにある。

初明二本地一者、法花文句云、名月是月天子、大勢至応作也。夫此菩薩位居二無垢一、徳隣二大覚一、慈悲覆二法界一、利益無二辺際一。観無量寿経云、挙身光明、照二十方国一、作二紫金色一。……（以下略）

最初に智顗『法華文句』を拠り所として、月天子が勢至菩薩の応作（応化身）であることを示し、ついで『観無量寿経』を引き、勢至菩薩の姿形を述べる。注意したいのは「名月是月天子、大勢至応作也」の記述であり、原拠である『法華文句』には

名月等三天子、是内臣如二卿相一。或云是三光天子耳。名月是宝吉祥月天子、大勢至応作。普香是明星天子、虚空蔵応作。宝光是宝意日天子、観世音応作。（三四：二四a、傍線部は『月講式』が引用した箇所を指す。以下同）

とある。これは『法華経』序品における釈迦説法の聴聞場面、

爾時釈提桓因、与二其眷属二萬天子一俱。復有二名月天子、普香天子、宝光天子、四大天王一。（九：二一a）

を釈したものである。『法華文句』はこの名月、普香、宝光という三人の天子を「三光天子」として、このうち

の名月が宝吉祥天子であり、大勢至（勢至菩薩）の応作であることを述べている。

実は式文の第二段で垂迹として明かされるのが、この名月天子である。垂迹が名月天子であることは、第二段一～三の礼拝の詞に「南無帰命頂礼　名月天子」とあることからも明らかであろう。『月講式』は式文第二段一の冒頭で、名月天子について次のように述べる。

次明二垂迹一者、就レ之有レ二。一明二帰依道理一、二明二滅罪生善一、三明二懺悔発願一。一明二帰依道理一者、夫名月天子者、一乗同聞、三光第一也。

この「三光第一」は、先に見た『法華文句』の「或云是三光天子」の記述と、『法華経』薬王品に「又如二衆星之中、月天子最為第一」（九：五四a）とあるのに基づくものである。『法華経』序品の「名月天子」と薬王品の「月天子」に明確な接点はないが、『月講式』はこの二つを同体と見なしている。さらに第二段二ではこの月天子が

夫月天子在レ東称二月光一、在レ西号二勢至一。

という講式独自の説のもとに月光菩薩と同体とされ、『続高僧伝』に見える、月光菩薩が智璪大師の病を治したという霊験譚が記される。[12] さらにこれを『大日経』に見える月天と結びつけ、『大日経義釈』の説を取り入れることで、複合的な尊格をつくりあげている。すなわち『大日経』に

黒天、自在子天、日天、月天、龍尊等（一八：二b）

として見える月天は『大日経義釈』において

又、月天ノ真言（中略）一切世間以レ月能息除二熱悩一、施二清涼楽一。故謂二之甘露一。造暦者伝云、此甘露有二十六分一。乃至以十五分遍施二衆生一、以二所レ余一分一還生。（『続天台宗全書　密教Ⅰ』三〇五頁）

と、月天の真言に熱悩を除く甘露の性質があると解釈され、これが『月講式』第二段二に「或処云」としてほぼ同文で引用されている。

或処云、一切世間以下月能息除二熱悩一施中清涼楽上故謂二之甘露一。此甘露有二十六分一。乃至以二十五分一遍施衆生。以二所餘一分一還生云々。

以上、見たように、『月講式』で語られる本尊＝月天子は、『法花経』―『法花経文句』、『大日経』―『大日経義釈』という、顕密の経疏による複合的解釈を通して導き出される尊格として顕されている。

## 三　懺悔発露の式文と論理展開

つぎにこの複合的尊格＝月天子を前に行われる懺悔発露について、第二段三の式文から解釈する。

三明二懺悔発願一者、夫流転之業、妄念為レ因。妄念不レ息、出離何時。悲哉。三業四儀皆是生死之因、歴縁対境無レ非二流転之媒一。就中、翫月之人、瀝露之客、触レ境触レ物、不レ可レ不レ恐。北堂西園之秋暮、馳二思於出レ山之清光一、閑窓深洞之曉天、摧二魂於迫レ嶺之斜影一。蓋是雪月花内催二興四時一、日月星中結二交三友一之故也。唐室月前遙伝二霓裳羽衣之曲一、緱嶺霜底猶有二鸞吟鳳唱之声一。仙人已然、俗客豈堪。明月峽之曉光、行々不レ盡。花陽洞之秋草、看々猶新。或望レ光称レ霜、翫レ草号レ雪。或思二山平一、願二天不一レ曙。徒起二亀毛菟角之見一、空貽二狂言綺語之謬一。或有二寡妾擣レ衣処一、或有二老將上レ樓処一、或楽者弥楽、家々笙歌、或愁者増レ愁、往往悲吟。云レ楽云レ愁、遠離二解脱一、愛レ之翫レ之、無レ非二妄念一。況沈吟二斉章一慇懃二陳篇一乎。上賢如レ此、下愚誰免。

式文はまず、流転の業因が妄念であり、その妄念を滅する事がなければ出離（解脱）はあり得ないとする。そして『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』などから、月に関わる詩句[13]を引き、こうした月を翫ぶものの営為（詩歌管絃）を「徒起亀毛菟角之見、空貽狂言綺語之謬」とし「無非妄念」と断罪する。この「亀毛菟角」「狂言綺語」の二句は、月を翫ぶ営為の否定ではなく、後に続く諸法実相論のための布石である[14]。だからこそ式文は次のように展開される。

閑思二道理一、倩案二聖教一、以二妄念一触二聖境一。薬童子之喩在レ眼。以二染心一縁二仏法一。花厳経之説可レ聞。心麁境妙巨益是多。但依レ地而顛還依レ地起。須寄二心月輪一以懺悔二罪障一。

妄念をもっても聖境（仏界）に触れることができ、染心をもっても仏法に結縁することができると『月講式』は言う。その妄念、染心とはこれまで述べられてきた月を翫ぶ営為（詩歌管絃）に他ならない。そしてその根拠に「薬草童子之喩」と「花厳経之説」をおく。順序が入れ替わるが、後者の「華厳経之説」とは『華厳経』中の句とされる「三界唯一心　心外無別法」という、いわゆる「如心偈」を指す[15]。華厳の側から諸法実相論を説いたものであり、三界はただ一つの心から出たものであることを示したものである。この論理に基づけば、染心もまた一心に帰するので、「染心縁仏法」も可能となる。

これに対して前者の薬草童子の喩は、『大宝積経』の次の文章に見える。

耆域医王合集二諸薬一、以取二薬草一作二童子形一。端正妹好世之希有、所作安諦所有究竟、殊異無レ比。往来、周旋、住立、安坐、臥寐、経行、無レ所二缺漏一、

所二顕変一業。或有二大豪、国王、太子、大臣、百官、貴姓、長者一。来到二耆域医王一。視二薬童子一与共歌戯、相二其顔色一病皆得レ除。便致二安隠寂静無欲一。

（一一：四五c）

耆域（耆婆）医王が薬草でもって童子をつくったところ、あたかもそれが人間のごとく所作をなし、耆婆の元を訪れ、これと歌い戯れたものがみな病気を治したという故事を示す。『宝積経』によれば童子は「端正姝好（殊好）」であったというので、それは稚児の類であり、端的にいえば人々は妄念・染心をもってこれと戯れたのである。このことは『大宝積経』を引用する源信『往生要集』において、より明確な形であらわされている。

問、以二染心一縁二於如来一者亦有二利益一耶。答、宝積経第八密迹力士告寂意菩薩云。耆域医王……（八四：八五b、以下、『宝積経』に同じ）

記事は『往生要集』巻下の問答料簡に属するもので、そのうち「麁心妙果（粗雑な心で行なう念仏の、勝れた果報）」を説くくだり、染心をもって如来と縁を結んでも利益があるか、という問いについて、源信が答えた部分である。源信によれば、たとえ心にやましいものがあったとしても、のぞむ対象さえよければ利益があるとし、その例証として『大宝積経』を引用する。[16]『月講式』はこの考え方をそのまま引き継いでおり、だからこそ式文で「心麁境妙（粗雑な心で勝れた境界に触れること）巨益是多」と述べるのである。『月講式』は第二段一の式文で「大集月蔵分中」といいながら、『往生要集』をそのまま引いているが、[17]その点も踏まえれば、『月講式』の「薬童子之喩」は『宝積経』ではなく『往生要集』によったと考えるべきであろう。

そしてこれに続く「但依地而顛還依地起」の句は、澄憲「和歌政所結縁経表白」や真如蔵本『言泉集』に見られるもので、懺悔発露の言葉であるとともに、迷いをきっかけとして悟りに至るという、諸法実相論における「迷悟不二」の考え方を表明するものである。ここに至り『月講式』は月を翫ぶものの思い＝妄念を、三界唯一心や迷悟不二という諸法実相論の論法を用いて、解脱の道へと結びつけたのである。

## 四　観想法の重層性

しかし、これではまだ妄念から出離への道すじが示されたに過ぎない。月講の参加者を、そして古今に及ぶ月を翫ぶものの営為を菩提へと導くためには、『月講式』が依拠した「和歌政所結縁経表白」がそうしたように、懺悔発露が行われなければならない。式文は続いてこう

述べる。

真常性月雖レ隠二重山一、円音教風猶遺二大虚一。無明巨夢中纔聞二深妙法一、三界唯一心。心外無別法。是故繋二縁法界一、心即是月。一二念法界一、月即是心。雖レ繋雖レ念、不レ出二一心一。雖レ寂雖レ照、只是一月。心月相即寂照同時。令二此観恵与レ心相応一、衆罪露消、一心月明。迷二此理一故受二諸熱悩一。今始覚悟慚愧懺悔。願不レ改二出レ山入レ嶺之望一、早為二自レ東往レ西之縁一。

まず湛然『止観弘決』を原拠とする「真常性月雖隠重山、円音教風猶遺大虚」を挙げたのち、先述の唯心偈「三界唯一心　心外無別法」を挙げる。その上で「是故…」とし具体的な観想法を挙げるのだが、この部分には幾つかの文献が混在している。以下に三つの観想法に分けてこれを示す。

一つめは月輪観である。月輪観は月と心を一体化させ心の浄化をはかるもので、引用されているのは『心地観経』の以下の記事である。

是満月輪五十由旬無垢明浄。内外澄澈最極清涼。月即是心、心即是月。塵翳無レ染妄想不レ生。（三：三二八c）

この『心地観経』の記述等が覚超（九六〇～一〇三四）や覚鑁（一〇九五～一一四三）に引用され展開したものが、密教における月輪観である。

二つめは円頓止観である。円頓止観は智顗『摩訶止観』に説かれるもので、その大意は灌頂『摩訶止観』序分に説かれている。

円頓者、初縁実相、造レ境即中、無レ不二真実一。繋二縁法界一、一二念法界一。一色一香、無レ非二中道一。已界及仏界、衆生界亦然。（四六：一c）

すなわち、あらゆるものが縁によって存在する世界においては、一瞬の思いもまた世界に繋がることを説いたものである。『月講式』は三界唯一心という諸法実相論の鍵語のもと、月の出入りが一つの月の作用であるように、一瞬の思いとその思いを世界にかけることが一つの心の作用であることを示す。それは講式中で「雖繋雖念、不出一心。雖寂雖照、只是一月。心月相即寂照同時」として示される通りである。

その上で『月講式』は、三つめの修法として懺法（法華懺法）を挙げる。懺法は『観普賢経』に基づき、普賢菩薩像を前に懺悔発露を行うものである。『月講式』でも式文第二段三の伽陀で、この『観普賢経』の「一切業障海　皆従妄想生…」一文が用いられているが[18]、式文本文の引用は『観普賢経』ではなく伝慧思『法華懺法』に

よるもので、六情根の懺悔のうち、意根を述べるくだりが『月講式』に引用されている。

当知一切諸法　悉是仏法　妄想分別　受諸熱悩　是則於菩提中　見不清浄　於解脱中　而起纏縛　今始覚悟　生重慚愧　（七七：二六六c）

『法華懺法』が慧思作であるかは不詳だが、この文言は天台系の書物に盛んに引用されており[19]、懺法の言葉としては一般的なものであったと推察される。禅寂もまた、こうした天台系の書物に基づきこの句を選んだのであろう。

月と心を一体化させ、心を世界につなぎ、懺悔発露におよぶ。この重層的な観想法が、講式が講演の人々に求めたものであった。そして『月講式』は第二段の式文を次のように結ぶ。

自即是他、我願及レ彼。自レ昔至レ今、依二雪月花一貽二妄念一、翫二琴詩酒一、動二邪思一之輩、皆離二従レ冥入レ冥之苦一、互得二従レ明移レ明之楽一。遂達二凡心円明之真源一、共帰二普賢満月之心殿一。

「自即是他」という、この講式独自の言葉をあげて救済の対象が他人にも及ぶことを明示し、これまで月に妄念を懐いてきた「翫琴詩酒、動邪思之輩」の救済をはかる。彼らの迷いをあらわす「従冥入冥」の語は『法華経』化城喩品に基づくよく知られた言葉であるが、これを心と一体化した月が照らすことで「従明移明」に導くというのが、その主張であった。

## 五　『月講式』の意図するもの

ではかかる本尊と修法の重層性は、追善対象である長明の思想とどのように響き合うのか、以下に考えてみたい。長明と月との関係においてただちに思い起こされるのは、次の歌であろう。

104　対月忘西

朝夕ににしをそむかじとおもへども月まつほどはえこそむかはね

自撰集『鴨長明集』の末尾に配されるこの歌は、月に対する執は捨てられない、けれども仏道にも励みたい、という長明が長きにわたって懐き続けた葛藤を示すものであった。むろん、長明の思想には自らなる展開があり、養和元年（一一八一）に詠まれたこの歌をもって、長明全生涯の思想の統一を見ることはできない。ただ東と西には、そうした諸道と仏道の葛藤があり、それが『月講式』において意識され、そこに或る解答が用意されていたであろうことは、第二段三の次の言葉から容易に想像がつく。

願不レ改二出レ山入レ嶺之望一、早為二自レ東往レ西之縁一。

（再掲）

この部分について、今村が指摘するように「月が西に没するのを眺めながら、それをそのまま西方浄土往生の縁にすることを願う」[20]という意味はもちろんあるが、重要なのはむしろ東から出る月を望むことまでをも「不改」としている点である。この「不改」という表現は、『月講式』が依拠したと思しい澄憲「和歌政所結縁経表白」にも次のような形で見えている。

加之、翫レ月厭レ雲之思、残二妄想於暁天一、惜レ花嫉レ風之情、結二邪執於春空一。蓋雖レ非二殺盗之重罪一、猶屡残二綺語之罪過一。（中略）夫依レ地蹶者還依レ地而起。行レ路迷者還行レ路覚。不レ如。不レ改二和歌之風一、即尋二菩提之月一思食者也。

「結縁経表白」は和歌を「綺語之罪」としながら、その罪を菩提へと転じる方法は「不改和歌之風」に如くものはないとする。同じ構造を『月講式』にあてはめるならば、月を翫ぶことは妄念でありながら、それを菩提へと導くためには月に向かうことが最善である、ということになる。たとえ西に背いて東の月を望んだとしても、最終的には月は西へ往く。ここに東と西（諸道と仏道）は併存するのである。「結縁経表白」と『月講式』との構成および表現の近似にまで目を向けたとき、『月講式』の「不改」という句には、そうした諸道肯定の主張を読みとって良いように思う。

そして、この東と西の併存は、尊格の次元においても、次のような形で示されている。

二明二滅罪生善一、夫月天子在レ東称二月光一、在レ西号二勢至一。（式文第二段二）

すなわち月天子は東にあるときは月光菩薩であり、西にあるときは勢至菩薩である、という。本尊である虚空の月（＝月天子）は東から西へ往く。そしてそのどちらにあっても、それは尊格として示されるのである。さらに勢至菩薩が阿弥陀如来の脇侍であり、月光菩薩が薬師如来の脇侍であることをふまえれば、そこには西方極楽浄土と東方浄瑠璃浄土の存在がおのずと浮かびあがる。西が極楽浄土であるのは自明として、『月講式』が薬草童子の喩えや月光菩薩の霊験譚を引用してくる背景には、薬師如来と浄瑠璃浄土の存在が推定される。

なるほどこの講式の本尊は東から西へ往く。東から出る月も、西に沈む月も（心が一体であるように）同じ月であり、浄土の縁でもあるならば「対月忘西」の憂いもない。だが、この東には月光、西には勢至という解決策はやや都合が良いようにも思われ、諸道と仏道の葛藤に

向かいあった長明最期の到達点とするのには、疑問が残る。

さらに注意しなくてはならないのは『月講式』に示された論理の過程は、数寄とは若干異なるものの見方である、という点である。数寄とは通例、次のような文をもって説明されるものである。

中ニモ数奇ト云フハ、人ノ交ハリヲ好マズ、身ノシヅメルヲモ愁ヘズ、花ノサキチルヲ哀レミ、月ノ出入リヲ思フニ付ケテ、常ニ心ヲ澄マシテ、世ノ濁リニシマヌヲ事トスレバ、オノヅカラ生滅ノコトワリモ顕ハレ、名利ノ余執ツキヌベシ。コレ、出離解脱ノ門出ニ侍ルベシ。

（慶安版本『発心集』巻六）

又、管絃ハスキモノ、スベキ事ナリ。スキモノト云ハ、慈悲ノアリテ、ツネニハモノ、アハレヲシリテ、アケクレ心ヲスマシテ、花ヲミ、月ヲナガメテモ、ナゲキアカシ、ヲモヒクラシテ、此世ヲイトヒ、仏ニナラント思ベキナリ。

（狛近真『教訓抄』巻八（一二三三年成立））

すでに両者の接点は先行研究によってかたり尽くされ、[21] あらたに加えるべき事柄もないが、肝要は、数寄とは「心ヲ澄マシ」行うものである、という点にある。心を澄ますとは、和歌ならば和歌に、管絃ならば管絃に対し一心に打ち込むことで得られる状態をいう。こうした状態こそが仏道による修行で得られるものと同じである、というのがこの時代の数寄の効用として主張されてきたものであった。もとよりこれは数寄の原義ではなく、松村雄二の述べるように数寄とは十一世紀には名聞や名利と結びつくものの見方であった。[22] ただし、長明の時代になって仏道から数寄が捉えられるようになると、数寄は名聞や名利といった執を避け、「心澄む」状態によって行われるものであるとされた。

ところが『月講式』は、薬草童子の喩えで見たように、そうした執をも肯定的にとらえている。端的に言えばそれは、色にふけり、名聞をもとめ、富を得ようとしても、結果として救われればそれでよいのだ、というものの見方なのである。むろん、『月講式』は最終的には心と月を一体化させ、心の浄化をはかり、妄念を滅することを目指すものなので、目指す方向性としては数寄と変わらない。

それでも「心麁境妙巨益是多」といった主張は、『方丈記』の「ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふばかりなり」という修善態度とは異なる。そこには、どうしても講式の作者である禅寂独自の意図を見い

だささるを得ないのである。

そもそもそうでなければ、式文第二段三において、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』から多くの引用がされている点に説明がつかない。この点については、すでにグュルベルグの指摘があり、氏の「何ゆえに懺悔段に朗詠文が密集しているかといえば、それは、禅寂が方便として意識的に犯した「誤り」ではないかと思われる」[23]という見解に賛同したい。長明が執した管絃や和歌よりも、漢詩の文脈を多用したのは、禅寂（文章生長親）にとっての「狂言綺語之謬」が漢詩であったからであろう。禅寂はあえて自らが狂言綺語の誤を犯すことで月を翫ぶ者の一人となり、追善の対象である長明と、講式の作者である自身と、そして古より今に至る月を翫ぶ者たちを同一の地平におき、「自即是他」の思考を連ねたのである。

『月講式』における禅寂と長明との思想の関係をめぐっては、最終的に希求した点（月を望むことと浄土を目指すことの合一）こそ同じといえ、そこにいたる論理過程、本尊に付した思想性、意図的な漢籍の引用等、禅寂独自の思想と表現を認める必要があると思われる。

## 結語

本論では、講式の本尊を読みとくことからはじめて、その観想法について分析し、講式の思想についても考察を加えた。式文の構成こそ不自然にみえるが、『月講式』には読む者の心を捉えて止まない不思議な魅力がある。故人追善のための講式という私的なものでありながら、幾度かの書写が重ねられ、月講が再演されたことは、とりもなおさず、この講式に後人を惹きつける論理があったことを示している。

ただ、これまでの読みに従うのならば、その論理は長明の思想そのものではない。それは長明が生涯向かい合った諸道と仏道の葛藤を、東から西に往く本尊の重層性と、その本尊に対して行われる観想法の重層性のもとに、自ら妄念の徒となることで併存させようとする、禅寂の配慮というべきものである。

講式の典型と諸法実相論に則りつつ、その特殊な本尊の性質を最大限に活かし、故人の素意に配慮してつくられた、未完成にも見えるが高度な達成を示す講式、それが式文の読みを通して得られる『月講式』の評価ではないだろうか。

## 註

（1）禅寂（藤原長親）に関しては細野哲雄が基礎的資料をまとめている（「筑州と禅寂とについての覚書」（『鴨長明伝の

周辺・方丈記』笠間書院、一九七八年（初出一九六六年））。以下、細野の指摘する資料に若干の補遺を加えてその経歴を記すと、禅寂は生年不詳。没年は仁治二年三月二十二日（『平戸記』仁治二年三月二十四日条）。父は藤原兼光（一一四五～九六）、同母兄に資真（一一六二～一二二三）がいる。『尊卑分脈』によれば策命、蔵人、刑部少輔、民部大輔をつとめ最終官位は従五位であったとされる。『山槐記』治承四年（一一八〇）七月二十七日条に「藤長親〈文章生、兼光子〉」とあり、『吉記』養和元年（一一八〇）三月二十四日条に「令進士蔵人長親書目六」とあり除目の目録を執筆したことが知られ、また『山槐記（除目部類）』寿永元年（一一八二）正月十四日条に「六位文章生長親」とあることから、策命、蔵人までは史料から追う事ができる。文治四年（一一八八）二月十七日出家、『玉葉』同日条に「伝聞、兼光卿二男長親、出家入道云々、有情之人歟、可感可憐」とある。なお、関連する資料として歴博本『転法輪鈔』巻一に「中納言資長比野光堂供養表白」がある（本書は共同研究「中世における儀礼テクストの綜合的研究」（代表：阿部泰郎）により『国立歴史民俗博物館研究報告』で紹介予定である）。また久保田淳「大原と伊勢―信仰と表現の場を考えるために」（『中世文学』三四、一九八九年五月）にも禅寂に関わる資料が紹介されている。

（2）堀部正二「鴨長明の没年に関する一史料」（『中世日本文学の書誌学的研究』全国書房、一九四八年（初出一九四一年））。三田全信「禅寂と月講式」（『浄土宗史の新研究』隆文館、一九七一年）。桜井好朗「鴨長明と念仏聖」（『中世日本の精神史的景観』塙書房、一九七四年（初出一九六九年））。貴志正造「ひじりと説話文学―『発心集』の世界―」（『日本の説話　第三巻』東京美術、一九七七年）。重見一行「「月講式」をめぐって―長明発心検討―」（『仏教文学』一、一九七七年三月）。梁瀬一雄「方丈記の思想」（『鴨長明研究』加藤中道館、一九八〇年（初出一九七九年））。磯水絵「『月講式』再検」「金剛三昧院本『月講式』をめぐって」（『説話と音楽伝承』和泉書院、二〇〇〇年（初出一九八七年））。今村みゑ子「長明企画禅寂作成『月講式』の意図」（『鴨長明とその周辺』和泉書院、二〇〇八年（初出一九九三年））。鈴木佐内「禅寂作「月講式」と鴨長明」（『中世仏教文学研究―今様と随筆』おうふう、二〇〇三年（初出一九九九年））。ニールス・グュルベルグ「『月講式』にあらわれた禅寂の思想」（『仏教文化の基調と展開』山喜房佛書林、二〇〇一年）。

（3）磯水絵によって三本の校訂がなされている。前掲注2磯論文参照。

（4）この視座から『月講式』に言及するものとして三田全信

（前掲注2）、佐々木八郎などの論がある。佐々木八郎「続々・方丈記私論」（『中世文学の構想』明治書院、一九八一年）。

（5）『山田昭全著作集　第一巻』（おうふう、一〇六頁）。

（6）前掲注2今村論文、二八五頁。

（7）千本英史「鴨長明と数奇をめぐって」（『国語と国文学』八七―九、二〇一〇年九月）脚注22参照。今村は先行研究の整理において、『月講式』の思想の主体を長明においた研究者として貴志正造と梁瀬一雄を、禅寂においた研究者として桜井好朗と重見一行を挙げている（前掲注2参照）。ただし、『月講式』を「数寄そのものの全面否定」とする重見に対し、桜井は『月講式』に長明が希求した思想性が看取され、それに禅寂が応えたものとしており、二人の見解には多分に相違がある。

（8）金剛三昧院本は表白を持つが、奥書に「本無啓白」とある通り、後人による増補である。

（9）前掲注2でグュルベルグは、『月講式』の「此講演作法不似通途法則」といった一文が講式における常套句であることをふまえ、「『月講式』は本尊から見ても、決して異例の講式ではない」（三六九頁）とする。たしかに「此講演作法…」の一文をもって、この講式が異例の作であると読むのはあやまりであるが、それでも虚空の月を本尊とする、という形式は他の講式に類例がなく、この講式の第一の特徴としてまず挙げてよいものであると思う。

（10）前掲注2今村論文、二八六頁参照。

（11）猪瀬千尋「弁才天を記す基礎文献についての分析―西園寺妙音堂本尊の究明に向けて」（『比較人文学年報（名古屋大学）』八、二〇一一年三月）。

（12）前掲注2今村論文、二九一頁参照。

（13）漢詩の引用部分については前掲注2グュルベルグ論文参照。

（14）前掲注2今村論文、二八一頁参照。なお「亀毛兎角」「狂言綺語」の二句は上覚『色葉和難集』序文にも見られ、『月講式』と同じく諸法実相論で語られている。

（15）前傾注2グュルベルグ論文、三九二頁参照。

（16）日本思想大系の脚注による。

（17）「於仏前発誓願言…」の記述が、『往生要集』（八四：八七c）に一致する。

（18）前掲注2、今村論文、二八八頁参照。陽明文庫本は「一切業障海〈一行〉」と略述する。

（19）『真如観』（大日本仏教全書三三：六二頁）、『観心略要集』（同三一：一七一頁）、『自行略記』（恵心全集五：六〇二頁）など伝源信著作に多く引用がみられる。

（20）前掲注2今村論文、二八五頁。

(21) 榊泰純「管絃往生試論」(『日本仏教芸能史研究』桜楓社、一九八〇年)。小野恭靖「芸能説話の生成」(『韻文文学と芸能の往還』和泉書院、二〇〇七年)など参照。

(22) 松村雄二「『数寄に関するノート—和歌の数寄説話を中心として」(『共立女子短期大学文科紀要』三二、一九八八年二月)。

(23) 前掲注2グュルベルグ論文、三七八頁。

○引用文献は以下による。月講式(陽明文庫本)…鴨長明全集、教訓抄…日本思想大系、発心集(慶安版本)…鴨長明全集、和歌政所結縁経表白…諸人雑修善。また『大正新脩大蔵経』の引用については(巻:頁段)を記した。なお引用文には適宜、訓読点を付した。

(いのせ・ちひろ/日本学術振興会特別研究員)